

(一社)日本計画行政学会関西支部 2022 年度研究大会

シンポジウム「コロナ後のまちづくりと自治体経営」

② 対談「今後の自治体経営を考える」

対談： 大阪府泉佐野市長 千代松 大耕 氏
前和光市長・安田女子大学教授 松本 武洋 氏

司会：関西支部幹事・安田女子大学教授 竹下 智

日 時：2022 年 10 月 29 日(土) 15:30-16:00

司会（竹下幹事） 千代松様、非常に貴重なお話ありがとうございました。それでは、引き続きまして、松本前和光市長をこの場にお迎えをして、対談という形にしたいと思います。和光市は泉佐野市と並んで、東西、東京・大阪のベッドタウンという位置付けでありますので、一緒に話をいただく中で、色々示唆を得ることができるのではないかなと考えています。

松本（前和光市長、安田女子大学教授） 埼玉県和光市でございますが、泉佐野市がりんくうタウンということでしたが、和光市は利便性という意味で言うと、東京の隣町という位置付けでございます。この写真右側は今再開発が行われている和光市北口の想像図でございます。それから、左側が和光市内にある理化学研究所というところですね。場所的に言うと、これは「アド街ック天国」で和光市が取り上げられたときの写真ですが、東京にへばり付いておりまして、市民もよく「東京 24 区」などという話をしておりまして、非常に利便性が優位性を持つまちであります。住みたい街ランキングですとか、特に色々なランキングの中でも穴場ランキングで4年連続第2位ということで、北千住とずっとデッドヒートしているという人気のまちでございます。

何しろ多くの東京より便利じゃないかということがあって、人口も増え続けておりまして、人口が今8万4,000人近くになっています。池袋まで13分、その他、新宿、渋谷、銀座、霞が関、全部電車で一本で行けます。乗降客数17万9,000人は大体神戸の三ノ宮駅とか広島駅とかと同等でして、地下鉄の直通が入ってますので実際にはこの半分ぐらいというのが実態ではあります。外環道の2つのインターチェンジを使って、働く場所である工業団地を誘致したり、或いは住居系のまちづくりを展開しているところでございます。

一方で、ふるさと納税は負け組でして、千代松市長との対談について、ちょっと気が引けるなと思ったのは、ここでは惨敗をしているからです。さらに、先ほどの千代松市長の、総務省の返礼品規制、これによって実はそれまでは和光市が数百万円の寄付を集めることができていた友好都市・新潟県十日町市産の魚沼産コシヒカリが使えなくなりました。これが実は非常に痛くて、その後も低空飛行を続けている。そんな状況でございます。それは使えないよと言われたところですね。引き下がったから、駄目だというわけでありまして、そこで総務省に果敢に、屈せずに戦いを挑んで、そして、完全勝利を納めた千代松市長は市長会の中でもレジェンドとなってい

る。そんな状況でございます。

司会 松本先生ありがとうございます。千代松様、ふるさと納税の話が松本先生からも出たところで、ふるさと納税を始められているところは、ある意味、企業でいうと新規事業の立ち上げをうまく成長させていると言えると思います。一度色々あったにしても、再度立て直しておられます。これは、もちろん千代松様のお力も素晴らしいと思いますが、企業でもこのようなイノベーションを次々に起こすようなところでは組織力というのがやはり大事だと思います、同様に泉佐野市の組織力がやはり大きいのではないかと考えますが、その点、いかがでしょうか。

千代松（泉佐野市長） そうですね。多くの自治体さんとふるさと納税について意見交換をさせていただいている機会が結構あるんですけども、ふるさと納税が5億円未満の自治体さんで多いのは、やはりふるさと納税と他の仕事を兼務させているところ、非常に多くございます。泉佐野市でも、当初は兼務だったんですけども、専任職員を1人置きまして、ずっとその人間が担当していたんですけども、やはり5億円を超えたりとか、10億円を超えてきたらとても1人では手が回らないの状況になってきましたので、今は正規職員5人。もう100億を超えておりますので、それぞれがそれぞれの役割をしっかりと担ってもらいながら、正職5人と、そして会計年度任用職員、任期付短時間勤務職員等で合計今20名のチームで、ふるさと納税をしております、手前味噌ではございますけれども、ふるさと納税に関しての、そういうマーケティングとか、そういうものであったら本市の職員はどこに出しても恥ずかしくないような職員ばかり揃っております。

司会 ありがとうございます。松本先生から、自治体の経営というのは、金と人、すなわち経済と人口が重要だと教えていただいております。まず松本先生は和光市としては経済という面ではどのような施策を、これまで実施されてきたのでしょうか。

松本 和光市はですね、もともとホンダの一本足打法のまちでして、ホンダさんが工場持っていたわけです。そこが撤退しまして、今、オフィスになっていますが、働く人がガタッと減り、そこをどう補っていくかということで、先ほど高速道路のインターチェンジが2ヶ所あるというお話をしましたが、そ

こに大規模な区画整理事業、この第一期がこの間、終わりました、まだ続きやっておりますけれど、こちらに、例えば日本郵政の巨大な拠点ですとか佐川急便の事業所を誘致する、上場企業の本社を持ってくる、そんな感じで市内の働く場所をいわばホンダさんのあとをしっかりと埋められるようなものを用意するというをやってきました。

あとは働く場所と住む場所で、駅周辺の再開発と区画整理を昔からやる計画があったもののそれが遅れていたものですから、そこの事業化を図ってきました。こういったことの両輪で人口は増え続けているし、また、一時期地方交付税の不交付団体から交付になったわけですけど、その企業誘致等で、また不交付に戻ることができました。

司会 ありがとうございます。千代松様はふるさと納税をうまく活用されて、先ほどふるさと納税3.0というところで、色々な施策をご紹介いただきました。それに加えて経済をより活性化させていくという施策としては、どのようなことを実施されているのか、これからどんなことをお考えになっておられるのか、もしよろしければ、シェア頂けますでしょうか？。

千代松 泉佐野市も、正直、関西国際空港に一番近いまちでございますので、関空の一本足打法みたいなところがございまして、関空というのは中曽根民活の第3セクター方式で整備をされた空港でございますので、当初から民間会社、国が出資してる関西国際空港株式会社が所有している空港でございまして、民間会社であるということでそこから徴収する固定資産税をもって、泉佐野市が投資した莫大なインフラ整備の借金を返済していけるんじゃないかという風に国から言われて、それに乗って過剰なインフラ投資を続けたんですけども、実際その関空も開港当初は鳴かず飛ばずでございましたし、対岸の先ほど申し上げたりんくうタウンに本当は高層ビルが立ち並ぶというような予定でございましたが、それも殆ど空き地のまま開港したというようなところで、当初の税収よりは少ないんですけども、泉佐野市はそこそこ関空関連の税収が入ってきて、財政力指数でいうと、泉佐野市も不交付団体の時期があったんです。

ただ、関空の整備時のインフラ投資で莫大な借金を背負ってしまっておりましたので、その借金返済が非常に厳しくて、借金が返せないような状況にな

りつつあったので、財政状況が非常に悪化していき、実質公債費負担比率とか将来負担比率の4指標の中のその2つがかなり危険な水準といいますか、将来負担比率に関しましては早期健全化基準を上回って、泉佐野市は財政健全化団体というような状況になっていて、財政力はそこそこあるのに財政が厳しいという変わった自治体でありまして、そういうような背景があります。

ただ関空一本足打法というのは変わっておりませんでしたので、やはりここにきてコロナ禍で、関空の国際線が完全にストップした時期が長く続いてきた中では、市内の宿泊施設であったりとか、また空港関連の企業というのは、他の地域の企業さんと比べてもかなり疲弊して、地域経済が弱っているというような状況になっております。

コロナ禍の中で、本当に、泉佐野市は、関空に大きく依存してきたということが、如実にわかって参りましたので、そういうことじゃなしに、泉佐野市といたしましても、これがおかしなと言いますか、人は移動しなくても、モノは移動し続けてまして、実はコロナ禍で旅客便に積んでいた貨物というのが、旅客便が飛ばせなくなったので貨物便で飛ばさなければならぬということもあって、貨物便は過去最高を記録したんです。これも一つの関空依存から抜け出せない状況かもしれませんけれども、そういう特性はあったので、やはり物流ゾーンの整備であったりとか、企業誘致であったりとか、今その大きなプロジェクトというか山手のほうに物流拠点ゾーンをつくる。これもちょっと少し関空に依存してると言えばそうなんですけれども、そういうような事業を進めながら、こういうコロナ禍でもですね、何とか、見えてきた弱点というのを補っていこうという風に考えているところであります。

司会 ありがとうございます。次に、人に関しては人口を維持していく、もしくは増やしていく、それから人づくりと2つあるかと思いますが、人に関して、まず和光市はどのような施策を打たれてきたんでしょうか。

松本 和光市は自衛隊の官舎、大規模な官舎がある関係等で、非常に人口の流動性が高いという課題がございます。これを何とかしたいということが1点ですね。それからもう1つの課題としては昼夜間人口比率が低いという点がありました。ベッドタウンですので0.8ぐらいの水準を推移しておりました。

ですので、この2つの是正を図ってきたわけです。

1つ目は、とにかく、入ってきた人が定着しやすいように、例えば「将来の安心」という意味で地域包括ケアを先行して推進するという形で、歳をとってから元気でいられる地域をつくるということが1つです。もう1つは、「子育て支援」ということで、待機児童ワーストランキングに載ったりもしておりましたので、私の市長の12年間で、保育園の総定員数を2,000人から3,000人強へですね、1,000人強増やすという形でやってきました。あと昼夜間人口比率は先ほどの区画整備等で市内に働く場所を増やすという努力をやってきたということです。今後駅の北口の再開発、区画整理の中で、今度はまた、様々なお店なんかも集積してきますので、さらに改善できるものと思っています。

司会 ありがとうございます。企業で言うところの、入ってくる、採用する人をしっかり確保して、離職率をできるだけ低減させていく、そのような施策を打たれている、そんな形でしょうか？千代松様の泉佐野市の方は、人に関しては、どのようにお考えでしょうか？

千代松 やはりどうしても関西国際空港っていうのがございます。それにどうしても繋がってしまうんですけれども、泉佐野市は実はあまり知られてないことなんですけれども、京都市さんと並んで海外の友好都市数が日本で一番多いまちでもあるんです。私が市長にならせていただいてから、関西国際空港が目の前にありますので、どうしても海外からの友好都市を結ばないかという引き合いが非常に多くございまして、それに応じていましたら9つの都市と。前の市長の時代は1つしかなかったんですけれども、私が市長になってから8つのまちと友好都市を結びました。そういう風な形で市内の外国人の方の割合というものも非常に増えてきているというような状況でございます。コロナ禍で関空がストップして、まだ本格的に戻って来ないような状況ではないんですけれども、この10月時点でもうすでに過去最高、市内に2,000人を超える外国人登録があり、過去最高を記録しました。そういう特性もありますし、関空がこれから本格的に回復してきて、また2025年の大阪・関西万博、大阪でのIRとかそういうものも絡めて、さらに外国人の人数というものが増えていくんじゃないのかなという風に考えております。

そういう中で人をどうしていくかというところで

は、コロナ禍前もそうだったんですけれども、本当に泉佐野市内至るところにインバウンドの方々がほぼおられたんです。大阪市内か泉佐野かと言われるぐらいインバウンドが多くて、やはりそういう状況もございましたので、地元の方がいろんな違う文化をやはり理解していくとか、多くの文化とともに生きていく多文化共生とか、そういう人づくりに力を入れていきたいなというふうに考えており、そういうまちの特性がございますので、やはりこれはしっかりとそういう形で進めたいなと思ってます。

司会 ありがとうございます。泉佐野市は昼夜間で見ますと昼間の人口が多い。ベッドタウンは逆のパターンということが一般的な傾向だと思います。昼間の人口が多いということですけど、ここはやはり泉佐野市が地域での中核都市ということで、昼間の人口、人を呼び込んでいるという、そういう位置付けになるのでしょうか。

千代松 関空で働かれていますの方がやはり 1 万 5,000 人おられます。それで市内に住んでいる方の割合というのは大体 3,000 人ですけれども、他から関空へ働きに来られているということもあります。決して関空は泉佐野市だけのエリアじゃないんです。関空の中は、2 市 1 町でわかれてるんです。ただ泉佐野市が一番近いという部分で働いておられる方が多いエリアでもございますので、そういう中で昼間人口も高くなっているという風に考えております。

司会 ありがとうございます。今度は、別の観点からの質問をさせていただきたいと思うのですが、和光市も、泉佐野市も e スポーツに少し力を入れておられると、いろいろニュース等で拝見しております。この辺りいかがでしょうか。

松本 和光市の場合は、泉佐野さんほど幅広いというわけではなくて、いわゆる HADO というスポーツのゲームを公共施設として初めて児童センターの方に導入しまして、このセンターは PFI で作りましたけれど、今後、e スポーツが盛んになっていく中で HADO のメッカにしたいというそんな感じで意気込んでいるところがございます。HADO はご存知ですかね、皆さん。いわゆるカメハメ波みたいなのを飛ばすゲームですね。

千代松 大阪全体としては人口がわずかですけど増

えているんですけれども、大阪南部ではかなりの人口減少が見られてまして、昔から大阪での大きな問題といたしまして北高南低というのが長く言われておりました。例えば万博会場があったような北大阪、大阪市内、北部のエリアというのが非常に栄えて、大和川渡って泉州に入ったらもう、まあ言ったら田舎というような、そういうような北高南低っていうような問題がありました。それはまだ正直続いており、解消できたわけではございませんでして、大阪市内の人口、もしくは北摂の人口、大きな大阪の人口っていうのは、増加してるんですけれども、大阪南部の人口っていうのは減っております。

そういうような中で、大阪南部の私鉄で、南海電鉄さんがございまして、やっぱり沿線の働く方とかが非常に少なくなっているとか、若い方々がどんどん流出しているというところで、そういう部分で色々と危機感、自治体と同じぐらいの危機感を持っていただいている、何かこう新しい取り組みを進めていかなければならないなということで、南海さんが e スポーツに注目されており、南海なんば駅という南大阪の大きな駅があるんですけども、そこで 1 つ大きな施設をオープンされております。

うちでもそういう e スポーツを考えていたときに、南海さんからすごい積極的にいろんなご提案をさせていただいて、うちを逆に南海さんが引っ張ってってくれるような状況がありまして、これからキャンプであったりとか、e スポーツのプロの予備軍を養成していくとか。そういう大きな構想を考えていただいているので、泉佐野市もしっかりとタグを組んで、先ほど言わせていただいたりんくうタウンエリアというところを中心に展開して参りたいなと考えています。